宇宙論パラメータとサーベイ観測

須藤 靖

東京大学 大学院理学系研究科

物理学専攻・初期宇宙研究センター

2000年2月20日(日)~2月23日(水)

(第6回ICEPPシンポジウム@白馬村八方)

Contents

1	観測	的宇宙論研究のゴール	2
2	マイ	クロ背景輻射	3
	2.1	COBE (COsmic Background Explorer)	3
	2.2	MAP (Microwave Anisotropy Probe)	6
	2.3	PLANCK	7
3	銀河	「・クェーサーサーベイ	10
	3.1	LCRS (The Las Campanas Redshift Survey)	10
	3.2	HDF (Hubble Deep Field)	11
	3.3	SDSS (Sloan Digital Sky Survey)	13
	3.4	2dF (Two-degree Field) Survey	15
	3.5	すばる	17

4	超新星サーベイ 19	9
	4.1 Supernova Cosmology Project	9
	4.2 High-Z SN Search	2
5	重力レンズサーベイ 23	3
	5.1 MACHO (MAssive Compact Halo Objects) 23	3
	5.2 強い重力レンズ	7
	5.3 弱い重力レンズ	3
6	宇宙論パラメータ 29	9
	6.1 定義	9
	6.2 ハッブル定数 h	1
	6.2.1 ハッブル定数決定の問題点	1
	6.2.2 標準光源 (standard candle)	2
	6.2.3 Summary of the HST Key Project results 3	3
	6.2.4 Ia 型 超新星	4
	6.2.5 Sunyaev-Zel'dovich 効果	ĉ
	6.2.6 重力レンズ効果 (time delay) 41	1
	6.3 密度ゆらぎの振幅 σ_8	3
	6.3.1 CMB 振幅	3
	6.3.2 銀河団の個数密度	4
	6.4 質量密度パラメータ Ω_0 48	3
	6.4.1 渦巻銀河の回転曲線と銀河の質量光度比 48	3
	6.4.2 ビリアル定理とX線銀河団の質量 49	9
	6.4.3 銀河団のバリオン質量比)
	6.5 宇宙の曲率 $\Omega_K \equiv \Omega_0 + \lambda_0 - 1$	1
	6.6 宇宙定数 λ_0	3
7	まとめと展望 50	3

1 観測的宇宙論研究のゴール

宇宙論的 観測データ

↓ 理論モデル・計算機シミュレーション

宇宙の多様性の物理的理解

第一世代の天体(QSO、Pop.III stars?) 階層構造(星・銀河・銀河団・超銀河団) 物質密度と分布:バリオン・ダークマター 元素の起源(QSO吸収線系、銀河・銀河団) 宇宙の熱史(QSO、原始銀河・銀河団)

宇宙の初期条件の再構築

原始密度揺らぎの確率分布関数 原始密度揺らぎのスペクトル 宇宙論パラメータの決定

"観測データが限られている場合稀な天体ほど先に発見される"→天文学的興味からは重要だが、、、 宇宙論はごく平均的なものを対象とする 統計的均質性・信頼性・観測領域サイズがより重要

マイクロ波背景輻射 宇宙の大構造 重力レンズによるダークマターマッピング 超新星サーベイと宇宙定数

2 マイクロ背景輻射

2.1 COBE (COsmic Background Explorer)

赤外・マイクロ波における 宇宙背景輻射を観測することを目 的とし、NASA Goddard Space Flight Center で開発、1989年11 月18日に打ち上げられた。

- (a) $(0.05 \sim 0.5)$ cm の波長域にわたって、エネルギースペクト ルが 10^{-4} の精度でプランク分布と一致することの確認。
- (b) CMB の温度の高精度決定: $T_{\gamma,0} = 2.728 \pm 0.002 \text{K}$
- (c) 太陽系の運動の高精度決定: 速度 371 ± 1km/sec、銀河座
 標の経度 l = 264°.14 ± 0°.15、緯度 b = 48°.26 ± 0°.15 の
 方向。
- (d) 温度ゆらぎの発見: 7 度角と10度角スケールでの rms 値にして、それぞれ $\Delta T_{\rm rms}(7^\circ) = 33 \pm 2\mu {
 m K}$ 、 $\Delta T_{\rm rms}(10^\circ) = 29 \pm 1\mu {
 m K}$ 。



DIRBE (Diffuse Infrared Background Experiment: **拡散赤外背景輻射実験装** 置)、FIRAS (Far-Infrared Absolute Spectrometer: 遠 赤外絶対分光計)、DMR (Differential Microwave Radiometer: 差動型マイクロ 波測定器)の3種類の検出 器を搭載。

Figure 1: COBE 衛星。 (http://space.gsfc.nasa.gov/astro/cobe)





from antenna with roovable calibrator. Protective plastic covers with be removed.



The 8.6 rest DMM receiver partially associated. Corrupated cones are anternas.

Figure 2: FIRAS (左), DIRBE (中心), DMR (右)



Figure 3: 銀河中心の多波長観測



Figure 4: マイクロ波輻射温度分布地図 (monopole, dipole, residual)



Figure 5: DMR での4年間観 **測からの温度地図** (31, 53, 90GHz)。



 Figure 6: FIRAS および、ロケット、気球、地上観測から決定された CMB スペクトル



2.2 MAP (Microwave Anisotropy Probe)

COBE に比べて一桁以上の 高角度分解能で2年間観 測し、マイクロ波背景輻射 の全天温度地図を完成させ ることを目的とし、NASA Goddard Space Flight Center とプリンストン大が開発。 2000年秋 打ち上げ予定。

Figure 7: 銀河系輻射とMAPの観測バンド。分解能 (度、FWHM) は (0.93, 0.68, 0.47, 0.35, 0.21) at 22, 30, 40, 60, 90 GHz.



Figure 8: MAPの構成図 (http://map.gsfc.nasa.gov)

2.3 PLANCK



Detector	HEMT arrays				Bolometer arrays					
Temperature	$\sim 20 \mathrm{K}$				0.1K					
u(GHz)	30	44	70	100	100	143	217	353	545	857
$\Delta \nu / \nu$	0.2	0.2	0.2	0.2	0.25	0.25	0.25	0.25	0.25	0.25
# detector	4	6	12	34	4	12	12	6	8	6
$\Delta heta(')$	33	23	14	10	10.7	8.0	5.5	5.0	5.0	5.0
$\Delta T/T(10^{-6})$	1.6	2.4	3.6	4.3	1.7	2.0	4.3	14.4	147.0	6670

Figure 9: PLANCK 衛星。 (http://astro.estec.esa.nl/SA-general/Projects/Planck)



Figure 10: PLANCK 衛星ポスター。



 Figure 11: CMB 温度角度相関関数の多重極モーメント。

 上:現在の観測データをすべてまとめたプロット、

 下:MAP およびPLANCK で予想される誤差棒

3 銀河・クェーサーサーベイ

3.1 LCRS (The Las Campanas Redshift Survey)



(http://manaslu.astro.utoronto.ca/~lin/lcrs.html)

3.2 HDF (Hubble Deep Field)





Figure 13: Hubble Space Telescope (http://marvel.stsci.edu/top.html)



Figure 14: Hubble Deep Field は HST が、1995年12月18日から28 日まで紫外・青・赤・赤外の4つの波長域で天球上で一辺2.6 分角の領域を繰り返し露光したデータ(325枚の画像)をまとめ てつくられたもの。現時点で人類が観測し得えた宇宙の果ての 姿を示している。右は、1998年10月に HDF South として観測 されたものの一部。



Figure 15: HST の角度分解能の比較

3.3 SDSS (Sloan Digital Sky Survey)

日米共同の可視域における銀河・クェーサーサーベ イ観測プロジェクト。1998 年5月27日にファースト ライト。今後5年間で、測光・分光観測を終える予定。



北天 π ステラジアンの領域 の、5 色同時測光と 波長分 解能 $\lambda/\Delta\lambda = 2000$ の分光観 測。19 等級までの銀河 100 万個と20 等級までのクェー サー10 万個の分光サーベイ によって 3 次元分布地図を 作成する。

Figure 16: SDSS ファーストライトのデータで発見された最も遠方のクェーサー (z = 0) (http://www.sdss.org/)



Figure 17: ニューメキシコ州アパッチポイント天文台にある 2.5m SDSS 専用望遠鏡



Figure 18: SDSS ファーストライト 画像。





Figure 19: 2dF 銀河サーベイ領域。

2dFサーベイは、ロ 径 4m のアングロ オーストラリア天 文台望遠鏡に取り 付けられた 2dF と 呼ばれる多天体分 光器(400天体の同 時分光が可能)を 利用した英豪共同 の銀河・クェーサー 観測プロジェクト。 *b*_J バンドで 19.5 等 級より明るい銀河 25万個と、R バン ドで 21 等級より明 るい銀河1万個、 $18.25 < b_J < 20.85$ **のクェーサー**2万5 千個の分光観測を 行う。1996年10月 にファーストデー タ、1997年10月か ら多天体分光サー ベイ開始。

3.4 2dF (Two-degree Field) Survey



(http://www.mso.anu.edu.au/~rsmith/QSO_Survey/qso_surv.html)



Figure 21: 2dF 銀河サーベイの空間分布 (2000年1月時点)。 (http://www.mso.anu.edu.au/2dFGRS/)

3.5 すばる

国立天文台がハワイ島マウナケア山頂に建設した、口径8.2m の光学・赤外線望遠鏡。1999年1月にファーストライト。

近赤外線分光撮像装置 IRCS (Infrared Camera and Spectrograph) すばるの基本装置。

コロナグラフ撮像装置 CIAO (Coronagraph Imager with Adaptive Optics) 太陽系外惑 星の発見。

- 冷却中間赤外分光撮像装置 COMICS (Cooled Mid Infrared Camera and Spectrometer) 波長 10 ミクロンと 20 ミクロンでの、惑星系形成、星形成、ダスト形成の観測。
- 微光天体分光撮像装置 FOCAS (Faint Object Camera and Spectrograph) 100 天体同時 分光による遠方銀河の観測。
- すばる主焦点カメラ Suprime-Cam (Subaru Prime Focus Camera) 30 分角という大視 野での宇宙の大構造の研究、太陽系外縁部の小天体探索。
- 高分散分光器 HDS (High Dispersion Spectrograph) $\Delta \lambda / \lambda = 10^5$ の高分解能を持ち、星の元素組成、クェーサーの吸収線を研究。

OH 夜光除去分光器 OHS (OH Airglow Suppression Spectrograph) 上層大気の OH 分子 が出す夜光を取り除き、高感度を実現。遠方銀河、褐色矮星等の暗い天体の粗い分 光観測。

波面補償光学装置 AO (Adaptive Optics) 大気のゆらぎを実時間で補正する装置で、0.06
 秒角という角度分解能を実現する。



遠藤孝悦・画 日経サイエンス 1996年2月号より Illustration by Takaetsu Endo, taken from Nikkei Science 1996

Figure 22: すばる望遠鏡。



 Figure 23:
 すばる天文台のサイト(左上)、ドーム(右上)、望遠

 鏡(左下)。右下は、近赤外線カメラ CISCO を用いて、Jバン

 ド(1.25 ミクロン)で12.1 時間、K'バンド(2.13 ミクロン)で9.7

 時間観測して得られた SDF (Subaru Deep Field) 画像。

(http://www.naoj.org/j_index.html)

4 超新星サーベイ

Ia型超新星は、その最大光度がほぼ一定であることが知られて おり、いわゆる標準光源である。高赤方偏移にある銀河の中の 超新星を見つけて、その銀河までの距離を決めることで、ハッ ブル定数や宇宙論パラメータを決定することを目的とする。

4.1 Supernova Cosmology Project

ローレンスバークレー研究所を中心とした超新星サーベイ。



Figure 24: Supernova Cosmology Project **観測方針** (http://www-supernova.lbl.gov)



Figure 25: Supernova Cosmology Project 観測原理と例



Figure 26: Supernova Cosmology Project **観測結果**

4.2 High-Z SN Search

オーストラリア ストロムロ山天文台、ハーバード大学などを 中心とした超新星サーベイグループ。



Figure 27: High-Z SN Search $\mathcal{F}-\mathcal{L}$

(http://cfa-www.harvard.edu/cfa/oir/Research/supernova/HighZ.html)



Figure 28: High-Z SN のHST 画像例

5 重力レンズサーベイ

5.1 MACHO (MAssive Compact Halo Objects)



Figure 29: MACHO

サーベイを行って いるストロムロ山 天文台と望遠鏡。 大マゼラン星雲。 MACHO (マッチョ) プロジェクトは、 ストロムロ山サイディングスプリン グ天文台、カリフォルニア大学サンタ バーバラ、サンディエゴ、バークレーの 素粒子天体物理学センター、ローレン スバークレー国立研究所による共同研 究。我々の銀河系のハローの大部分を 占めているダークマターが、褐色矮星 や惑星のような天体 (MACHOs; MAssive Compact Halo Objects) によって占 められているかどうかを検証する。こ れらが存在すれば、重力レンズ効果に よって背景の星の明るさが10日間程度 増幅される。この振幅は大きいが、確率 はきわめて小さい。したがって、大マゼ ラン星雲の星 数百万個を数年間モニ ター観測する。そのために、ストロム 口山に50インチの専用望遠鏡(使われ) ずに放置されていた古いグレイトメル ボルン望遠鏡を再利用)を設置し、8つ の2048*2048素子のCCDを使って、赤、 青の2チャンネルで観測する。これは変 光星と区別するためであるが、逆に最 大の変光星カタログともなる。1993年 に初めてのイベントを検出した。



Figure 30: MACHO サーベイフィールド(左上:LMC, 右上:SMC) とレンズ候補の位置(下)



Figure 31: MACHO $\boldsymbol{\sigma}$ 1st detection (Alcock et al. Nature 365, 1993, 621)





Figure 32:フランスの
MACHO 探索プロジェ
クト EROS (Expérience
de Recherche d'Objets
Sombres)は、1990-
1995 にLMC 方向に1
つ、1996-1998 にLMC
方向(17.5 million stars
monitoring) に2つ、
SMC 方向に1つの重
カレンズ候補を検出。
これらから得られた
MACHO 天体質量と銀
河のハローに占める質
量比に対する制限

Figure 33: MACHO の 1992 年以来 5.7 年にわたる LMC 観測 (11.9 million stars monitoring) で、13 ~ 17 の重力レン ズ候補を検出。これら から得られた MACHO 天体質量は、0.15 ~ $0.9M_{\odot}$ 、銀河のハロー に占める質量比は、典 型的なハローモデルに 対しては 20% (8% ~ 50%) である。

5.2 強い重力レンズ

遠方のクェーサーからの光子の測地線が、近傍の銀河によって 重力レンズ効果を受け、観測者に多重像が観測される現象。す でに20個程度の例が知られている。観測量であるクェーサー の赤方偏移を決めたときには、そこまでの距離が大きいほど重 カレンズを受ける確率は高くなる。この距離は、宇宙の年齢と 同じく、 Ω_0 が小さいほど、また λ_0 が大きいほど 長くなるの で、重力レンズを受けたクェーサーの個数がこれらのパラメー タに対する制限を与える。これらから、 λ_0 に対する上限値 0.8 程度が得られている。



Figure 34: アインシュタインクロスとよばれている重力レンズ天体 2237+0305の銀河と4つのクェーサー像 (アパッチポイント天文台)



Figure 35: HST による重力レンズの画像

5.3 弱い重力レンズ

光子の測地線に沿った重力ポテンシャルによるレンズ効果。遠方銀河の像が、手前の銀河団による重力レンズ効果のために系統的に歪んでしまう。これを利用して、銀河団の質量を決定することができる。 さらには、銀河団ではなく、宇宙のなかのダークマターの空間分布を直接マッピングしたり、銀河のバローがどのようなプロファイルをしているかを調べたりする試みがされており、近年、理論的・観測的に注目されている。



Galaxy Cluster Abell 2218 Hubble Space Telescope • WFPC2

NASA, A. Fruenter and the LRO Team (SESCI; STFCE) + STScI-PHC00-08

Figure 36: HST による銀河団 A2218 のまわりの弱い重力レンズを 受けた銀河の画像

- 6 宇宙論パラメータ
- 6.1 定義
- ハッブル定数 h: ハッブルの法則: $v = H_0 d$ にでてくる宇宙の膨張率をあらわす比例係数がハッブル定数。この H_0 を100 km/sec/Mpcで規格化した無次元のハッブル定数; $h \equiv (H_0/100 \text{km/sec/Mpc})$
- 密度ゆらぎの振幅 σ_8 : 半径 $8h^{-1}$ Mpc スケールの (ダークマ ター) 質量ゆらぎ振幅の rms 値; $\sigma_8 \equiv \sqrt{\langle (\delta M/M)^2 \rangle}_{8h^{-1}$ Mpc
- 質量密度パラメータ Ω_0 :現在の宇宙の質量密度 ρ_0 を臨界密度 ρ_{c0} (宇宙がやがて収縮する値)で規格化したもの; $\Omega_0 \equiv \rho_0/\rho_{c0}$ **宇宙定数** λ_0 :アインシュタイン方程式に入る宇宙定数 Λ を無次 元化したもの; $\lambda_0 \equiv \Lambda/(3H_0^2)$
- 原始密度ゆらぎのスペクトル指数 n: 密度ゆらぎが生成された ときのスペクトルは一般に冪則であらわされる; $P(k) \propto k^n$ 。この指数nは、一般のインフレーションモデルではn = 1となるので、通常はこの値を仮定する。
- 密度ゆらぎのシェイプパラメータ Γ : 原始密度ゆらぎは、その後相対論的重力進化によって変形するが、その度合いは ダークマターの性質によって異なる。この変形は Γ という 1つのパラメータのみで近似的に表現できる。冷たいダー クマターの場合には、 $\Gamma \sim \Omega_0 h$ となり、独立なパラメータ ではない。
- バリオン密度パラメータ Ω_b : 現在の宇宙のバリオン質量密度 ρ_b を臨界密度で規格化したもの; $\Omega_b \equiv \rho_b/\rho_{c0}$ ビッグバン 軽元素合成の結果からは $\Omega_b h^2 \sim 0.02$ 程度である。

構造形成モデルに依存しない宇宙論パラメータの決定 (少なくとも) 4次元 ! \rightarrow (H_0 , Ω_0 , λ_0 , σ_8)

天体の距離の決定 $\rightarrow H_0$ high-z 超新星 $\rightarrow D_L(H_0, \Omega_0, \lambda_0)$ SZ 効果 $\rightarrow D_A(H_0, \Omega_0, \lambda_0)$ 球状星団の年齢 $\rightarrow \tau(\Omega_0, \lambda_0)/H_0$ 重力レンズ $\rightarrow (H_0, \Omega_0, \lambda_0)$ linear redshift-space distortion $\rightarrow \sigma_8 \{\Omega_0^{0.6} + \lambda_0(1 + \Omega_0/2)/70\}$

nonlinear redshift-space distortion $\rightarrow \sigma_8^2 \Omega_0$

構造形成モデルに依存した宇宙論パラメータへの制限

CMB 温度ゆらぎ \rightarrow (H_0 , Ω_0 , λ_0 , σ_8) X線銀河団の統計 \rightarrow (H_0 , Ω_0 , λ_0 , σ_8) 銀河・銀河団・クェーサーの空間分布とその進化 \rightarrow (H_0 , Ω_0 , λ_0 , σ_8 , バイアス)

- **6.2 ハッブル**定数 h
- 6.2.1 ハッブル定数決定の問題点
- $v_{\rm H} = H_0 d$ から H_0 を10%以内の精度で決定したい
- (a) 後退速度 v_H 推定の困難

実際に観測可能な速度は $v_{obs} = v_{H} + v_{pec}$ 。 宇宙膨張以外の成分 v_{pec} は典型的には500 km/s程度。

$$\frac{\Delta H_0}{H_0} = \frac{v_{\rm pec}}{v_{\rm H}} \sim 0.1 \left(\frac{50h^{-1}{\rm Mpc}}{d}\right) \left(\frac{v_{\rm pec}}{500 {\rm km/s}}\right)$$

 \rightarrow 遠方 ($d \gtrsim 50h^{-1}$ Mpc)の観測が必要。

(b) 距離 d 推定の困難(標準光源の方法)

天体の絶対光度 L:距離に依存しない観測可能量(速度分 散、変光周期)との間の経験式(近傍のデータから外挿) から推定

天体の見かけの光度 l:観測量 $\rightarrow d_{\rm L} = \sqrt{L/4\pi l}$

 \rightarrow 遠方天体のLを20%の精度で決定する必要

(c) 統計処理の困難

Lの分布関数と観測的選択効果による系統誤差

6.2.2 標準光源 (standard candle)

セファイド型変光星:

→ 変光周期とピーク絶対光度の関係

惑星状星雲光度関数

→ 光度関数の bright end のカットオフ

表面輝度ゆらぎ

→ 銀河の光度分布のゆらぎ

Tully-Fisher 関係

→ 渦巻き銀河の回転速度と絶対光度の関係

Ia 型超新星

→ 超新星の最大光度が(ある種の補正をした上で)一定 これらはいずれもセファイド型変光星をもとにしたゼロ点 の較正が必要

> ↓ 通常は大マゼラン星雲までの距離を用いる。

6.2.3 Summary of the HST Key Project results

HST(**ハッブル**宇宙望遠鏡)の観測から、18個の銀河の距離を 求め、ハッブル定数を10パーセントの精度で決定する。

 $H_0 = 71 \pm 3$ (統計誤差) ± 7 (系統誤差) km/s/Mpc 系統誤差: $\pm 5(LMC) \pm 3([Fe/H]) \pm 3(global) \pm 4$ (photometry)

Method	H_{0}
Local Cepheid galaxies	$73 \pm 7 \pm 9$
\mathbf{SBF}	$69 \pm 4 \pm 6$
Tully-Fisher clusters	$71 \pm 4 \pm 7$
${f FP}$ / ${f D}_N-\sigma$ clusters	$78 \pm 7 \pm 8$
Type Ia supernovae	$68 \pm 2 \pm 5$
SNII	$73 \pm 7 \pm 7$
Combined	$71 \pm 3 \pm 7$



6.2.4 Ia 型 超新星

Ia型 超新星(水素のスペクトル線が観測されない→ 白色矮星 の爆発)は、スペクトル、絶対光度、光度曲線がかなり一様で あるため、標準光源として用いられている。



Figure 38: Ia型 超新星の絶対光度が完全に一定であるとすると、 距離と見かけの明るさの間に散らばりがある(左上)。それ を、右図のように光度曲線の形を用いて経験的な補正 (Multicolor Light Curve Shape; MLCSの方法)を行うと、非常に分散 の少ない標準光源となる(左下)。Multicolor Light Curve Shape (MLCS) Riess, Press & Kirshner (1997)

これらの方法で、距離スケールの絶対的な零点を決めているの は、実は大マゼラン星雲までの距離。

Hipparcos 衛星による太陽近傍のセファイド 223 個の三角測量大 マゼラン星雲までの距離指標 μ が 従来の 18.5 から 18.7 に? (Feast & Catchpole 1997).

 $\mu = m - M = 5\log_{10}(d/Mpc) + 25$

 $\rightarrow d_{LMC}(\text{new}) = d_{LMC}(\text{old}) \times 10^{0.2/5}$ 距離が1割増える (50→55 kpc) → H_0 が1割小さくなる !?



LMC distance - kpc

 Figure 39: HST キープロジェクトから得られた H₀ と仮定した大

 マゼラン星雲までの距離との間の制限を 67% 信頼度の等高線

 で描いたもの。4つの線は、用いた標準光源に関する経験的

 関係の違いを示す。TF (タリーフィッシャー関係), SNIa(Ia型

 超新星), SBF(表面輝度ゆらぎ), FP(基本平面)。(J.Mould astro

 ph/9909260)

Sunyaev-Zel'dovich 効果 6.2.5



Figure 41: 数値シミュレーションによる銀河団の、X 線温度、X 線輝度、SZ 輝度(ミリ波とサブミリ波)等高線 (Yoshikawa, Itoh, & Suto PASJ 50, 1998, 203)

10-5 10-2 10-1

10⁻⁷ 10⁻⁶

6 8 10 10⁻⁸

2

4

3

10¹ 10⁻²

10-1

4

101

X線の観測データと組み合わせることで、その銀河団までの距離と、CMBの静止系に対して相対的に運動している速度(特異速度)を推定できる。

X線観測:銀河団からの熱制動輻射

$$S_X = \frac{1}{4\pi(1+z)^4} \int_{\infty}^{\infty} \alpha(T_e) n_e^2 dl$$

銀河団の奥行き $D: \leftrightarrow \Delta T \propto n_e D, S_X \propto n_e^2 D$ ↓ 銀河団が球対称であると仮定 (角直径) 距離 $d_A: 視直径 \theta_X \ge D$ の比 $\leftrightarrow d_A = \theta_X / D \sim cz / H_0$

SZ 动果による H₀ の推定値



 Figure 42:
 SZ 効果を

 用いる方法は、その原理と近似の意味

 の原理と近似の意味

 であるという意味

 で、他の天文学的

 方法に比べて有望

 である。ただし、

 現状ではまだ観測

 的な不定性が大きい。Kobayashi、

 Sasaki & Suto PASJ

 48(1996)L107



 Figure 43: 我々が観測した銀河団 RXJ1347-1145の ROSAT による

 X 線等高線と可視光イメージ。 この銀河団の赤方偏移は 0.45

 で、全天で一番明るいX線銀河団である。(Schindler et al. A&A

 1997, 317, 645.)



Figure 44: 我々の観測期間中に撮影した野辺山電波望遠鏡



Figure 45: J.C.Maxwell サブミリ波望遠鏡のパンフレットの表紙 と、そこに取り付けられている検出器 SCUBA。



Figure 46: X線で最も明るい銀河団RXJ1347のSZ効果プロファイ ル。野辺山観測: 21GHz (左上)、43GHz (右上)。JCMT観測: 350GHz (下) (Komatsu et al. 1999, ApJ, 561, L1)

6.2.6 重力レンズ効果 (time delay)

重力レンズを受けたQSOの2つのイメージ間の光子の到着時間のずれを用いる。

 \downarrow

経路の違いによる幾何学的な時間差と、重力ポテンシャルの 違いによる時間差

重力レンズ 0957+561A, Bを用いた H₀の決定



Figure 47: QSO0957+561 の重力レンズ像A, B

時間差の観測的決定 (Kundić et al. 1997)

 $\Delta t_{\rm AB} = 417 \pm 3 {\rm days}$

レンズ銀河の速度分散の決定 (Falco et al. 1997)

$$\sigma_v = 266 \pm 12 \mathrm{km/s}$$

 $H_0 = 62 \pm 7 \left(\frac{\sigma_v}{266 \text{km/s}}\right)^2 \left(\frac{\Delta t_{\text{AB}}}{417 \text{days}}\right) \text{ km/s/Mpc}$



Figure 48: 0957+561A, **Bの光度曲線と**time delay



Figure 50: $\ell_{\Lambda K} \geq \ell_{eq}$ は、Sachs-Wolfe 効果が効く波数の範囲、 ℓ_A は音波振動のピークのスケール、 ℓ_D は散逸による減衰の特徴 的スケール。 $\Omega_K \equiv 1 - \Omega_{\Lambda} - \Omega_0$ 。Hu, Sugiyama & Silk, Nature 386 (1997) 37

6.3 密度ゆらぎの振幅 σ₈

6.3.1 CMB 振幅

6.3.2 銀河団の個数密度



After 0 - 0.5 billion years -- starting out with a very smooth distribution of matter directly after the Big-Bang, gravity of the more massive clumps of stars starts to attract more matter.



After 0.5 - 1 billion years -- larger clumps grow from merging of smaller ones.



After 1 - 2 billions years -- after growing to a fraction of the size of our own Galaxy, the clumps are large enough for Hubble Space Telescope to see them.



After 2-4 billion years -- larger irregular looking objects form through collisions and mergers between these sub-galactic sized clumps.



After 4-13 billion years -- galaxies as we see them today form, and take their final shapes. The elliptical and the spiral galaxies with old red stellar populations in their centers form first, and the spiral galaxy disks form later from infalling surrounding gas.

Credit: Sam Pascarelle (Arizona State University)

Figure 51: 宇宙の構造形成進化のイメージ Sam Pascarelle (Arizona State University)



Figure 52: 冷たい暗黒物質宇宙モデルにおけるダークマターハ ローの進化 (Jing + YS 2000, ApJL, 529, L69)



Figure 53: 冷たい暗黒物質宇宙モデルにおけるダークマターハ ローの密度プロファイル (Jing + YS 2000, ApJL, 529, L69)



Figure 54: **銀河団の個数密度の観測値と理論予言**(a) soft X-ray (0.5-2.0 keV) (b) hard X-ray (2-10 keV), and (c) submm (0.85 mm) bands.



Figure 55: CDM モデルにおける軟 X 線銀河団個数分布からの $\sigma_8 - \Omega_0$ に対す る制限 (1 σ) (Kitayama, Sasaki & Suto, PASJ, 1998, 50, 1).

6.4 質量密度パラメータ Ω₀

6.4.1 渦巻銀河の回転曲線と銀河の質量光度比



Figure 56:渦巻銀河 (左:NGC2403, 右:NGC3198)の表面輝度 (上)と、中性水素の21 cm 電波輝線から求められた回転曲線 (下)。van Al-bada, T.S. and Sancisi,R.Phil.Trans.R.Soc.LondonA320(1986)447.

銀河の質量光度 Figure 57: 比。長方形の領域が、銀 河の表面輝度が1平方秒 角あたり 26.5 等級となる Holmberg 半径での M/Lの典型的な範囲。折れ線 でつながっているデータ は、同じ銀河の M/L。破 線と点線は、それぞれ楕 円銀河と渦巻銀河に対す る Holmberg 半径より大き な半径での M/L に対する 近似式。N.A. Bahcall et al. The Astrophysical Journal 447(1995)L81.

6.4.2 ビリアル定理とX線銀河団の質量

銀河団の質量を、そのなかの銀河をテスト粒子と考えた時の力 学平衡の式、あるいは、高温ガスの静水圧平衡の式より推定す ることが出来る (ビリアル質量)。

銀河を用いた光学観測:

$$M(R) = -\frac{R^2}{G} \left[\frac{1}{\rho_{\rm gal}(R)} \frac{d \ \rho_{\rm gal}(R) \sigma_r^2(R)}{d \ R} + 2 \frac{\sigma_r^2(R) - \sigma_t^2(R)}{R} \right],$$

高温ガスを用いたX線観測:

$$M(R) = -\frac{k_{\rm B}T_{\rm gas}(R)R}{G\mu m_{\rm H}} \left[\frac{d\,\ln\,n_{\rm gas}(R)}{d\,\ln\,R} + \frac{d\,\ln\,T_{\rm gas}(R)}{d\,\ln\,R}\right]$$



Figure 58: 質量光度比と その天体のスケールの 関係。 あるスケール まではリニアに増大す るが、やがて一定値に 落ち着く。その値はおよ そ $\Omega_0 \sim 0.3$ に対 応。 N.A. Bahcall et al. The Astrophysical Journal 447(1995)L81.

6.4.3 銀河団のバリオン質量比

銀河団程度のスケールでは、バリオンと(暗黒物質を含む)全物 質の質量比は、宇宙の平均的な比 Ω_b/Ω_0 と同じであると考えら れる。一方、バリオンの密度パラメータ Ω_b は、ビッグバン宇 宙元素合成理論から

 $\Omega_b = (0.015 \pm 0.01) h^{-2}$

という制限が得られているので、逆にΩ₀が推定できる (White & Frenk 1991)。例えば、髪の毛座銀河団に対しては、ビリアル 質量が光学観測から

 $M_{\rm Coma}^{\rm opt,tot}(< 1.5 h^{-1}{\rm Mpc}) = (6.7 \pm 1.0) \times 10^{14} h^{-1} M_{\odot}$

量がX線観測から

 $M_{\rm Coma}^{\rm X,tot}(<1.5h^{-1}{\rm Mpc}) = (6.82\pm0.34)\times10^{14}h^{-1}M_{\odot}$

と推定されている。一方、X線光度からガスの質量は

 $M_{\rm Coma}^{\rm gas}(< 1.5 h^{-1}{\rm Mpc}) = (5.45 \pm 0.98) \times 10^{13} h^{-5/2} M_{\odot}$

である。また、メンバー銀河に含まれる星の全質量をBバンド 光度から推定すると

 $L_{\rm B,Coma}(< 1.5 h^{-1} {\rm Mpc}) = 1.95 \times 10^{12} h^{-2} L_{\odot}$

 $\Downarrow \qquad M/L = 8h(L/10^{10}h^{-1}L_{\odot})^{0/35} \sim 6.4h$

 $M_{\text{Coma}}^{\text{star}}(< 1.5 h^{-1} \text{Mpc}) = (1.0 \pm 0.2) \times 10^{13} h^{-1} M_{\odot}$ これらから、髪の毛座銀河団のバリオン質量比は、

 $F_{\text{Coma}}^{\text{baryon}}(<1.5h^{-1}\text{Mpc}) = \frac{M_{\text{Coma}}^{\text{gas}} + M_{\text{Coma}}^{\text{star}}}{M_{\text{Coma}}^{\text{tot}}} = 0.08h^{-3/2} + 0.015$

この比が宇宙の平均値である Ω_b/Ω_0 に等しいならば

$$\Omega_0 \sim (0.16 \pm 0.1) \qquad (h = 0.7)$$

6.5 宇宙の曲率 $\Omega_K \equiv \Omega_0 + \lambda_0 - 1$



Figure 59: CMB 温度ゆらぎの角度 相関関数のピークの位置は、宇 宙の曲率である $\Omega_K \equiv \Omega_0 + \lambda_0 - 1$ に最も強く依存する。MAPや PLANCKの目的の一つはこれを 精度良く決定することであるが、 BOOMERANG と名付けられた 伊米英の気球実験のNA(北米)テ ストフライト (1997年8月25日6 時間飛行) で $\Omega_K \sim 0$ という結果 が報告されている。本飛行 (1998 年12月29日 ~ 1999年1月8日)も すでに終了しており、259時間の データが取得済である。



Figure 60: BOOMERANG に搭載された long duration ballooning (LDB) 用のアレイ検出器。



Figure 61: BOOMERANG/NA から得られた CMB 温度ゆらぎの 角度相関関数と理論予言(左)。実線は $(\Omega_b, \Omega_0, \lambda_0, n_s, h) =$ (0.05, 0.26, 0.75, 0.95, 0.7)、 点線が SCDM。 このデータから得られた $\Omega \equiv \Omega_0 + \lambda_0$ の likelihood function(右)。 点線は cumulative likelihood.



Figure 62: BOOMERANG/NA および COBE からの likelihood contour. ピーク値の 0.32, 0.05, 0.01 の等高線。三角がベストフィ ット。

6.6 宇宙定数 λ₀



Figure 63: Supernova Cosmology Projectの観測結果



Figure 64: High-Z SN Searchの観測結果



Figure 65: Supernova Cosmology Project からの、宇宙定数への制限



Figure 66: High-Z SN Search からの、宇宙定数への制限



Figure 67: 宇宙のスケール因子の時間発展。ここでは、 $H_0(t-t_0)$ を横軸に選んでいるので、それぞれのモデルが、R = 0となる点と原点との距離が現在の宇宙年齢に対応する。また、 $t = t_0$ での接線の傾きが一致する。宇宙定数がない $(\lambda_0 = 0)$ 場合には、アインシュタイン・ドジッターモデル $(\Omega_0 = 1)$ を境にして、 $\Omega_0 > 1$ ならばやがて収縮に転じ、 $\Omega_0 < 1$ なら永久に膨張しっぱなしの宇宙となる。一方、正の宇宙定数 $(\lambda_0 > 0)$ を持つモデルの場合、 $R \ll (\Omega_0/\lambda_0)^{1/3}$ の時期は λ_0 の影響は無視できるが、逆に $R \gg (\Omega_0/\lambda_0)^{1/3}$ となると、 Ω_0 の項が無視できるようになりやがて宇宙は指数関数的膨張を始める。

7 まとめと展望

ハッブル定数: $h = 0.71 \pm 0.07$

HST キープロジェクトが終了し、近傍宇宙からのハッブ ル定数の値はこれ以上決まらないであろう。今後は、距離 尺度の原点を与えるセファイドの較正(特にLMCまでの 距離)や、遠方宇宙の観測から直接ハッブル定数を決める (超新星、SZ効果)ことが重要となる。

方法	H_0	references
セファイド型変光星 (HST)	73 ± 9	Freedman (1999)
惑星状星雲光度関数	$75 \sim 100$	Jacoby et al. (1990)
表面輝度ゆらぎ	81 ± 6	Tonry et al. (1996)
Tully-Fisher 関係	73 ± 7	Madore et al. (1997)
SN Ia	55 ± 5	Sandage & Tamman (1997)
SN Ia (MCLS)	65 ± 3	Riess, Press & Kirshner (1997)
SZ 効果	$30 \sim 90$	Kobayashi et al. (1996)
重力レンズ	63 ± 12	Kundić et al. (1997)

密度ゆらぎの振幅: $\sigma_8 \approx 1 \pm 0.5$

天体の空間分布とダークマターの空間分布との違い(バイ アス)を理解することが重要。

質量密度パラメータ: $\Omega_0 = (0.1 \sim 0.4) \ll 1$

我々の宇宙が低密度(臨界密度以下)であることはほとん ど確実

宇宙定数: $\lambda_0 = 1 - \Omega_0 \sim 0.7$?

超新星データの解釈は別としても、宇宙論的には宇宙定数 があるほうが好ましいのは事実。今後の観測的進展は最も 期待できる。ただしその起源を理論的に説明しようとする のは不毛であろう(人間原理的な考察を除く)。

Expanding the expanding universe

0-th order	ー様等方宇宙モデル
	$($ 宇宙論パラメータ $,\Omega_0,\lambda_0,h$ の理解 $)$
1st order	密度揺らぎの線形摂動論
	(宇宙の大構造、マイクロ波背景輻射)
2nd order	非線型重力進化
	(ダークマターの構造形成)
3rd order	バリオンガスの進化
	(第一世代天体と元素の起源)
4th order	銀河、星、惑星の形成と進化
	(光り輝く銀河宇宙の誕生)
M-th order	生命の起源・進化
	(宇宙論的生物発生学)
N-th order	知的生命体への進化、文化・文明・宗教
	(宇宙論的生物進化学)
	•••
∞	宇宙の終焉

天文学は、これから10年から20年程度、新たな観測的発見の洪水が約束されている。しかし、これはいつまで続き得るのであろう。

ビッグサイエンスが成立する条件:必要な投資とそれから得られる利潤(科学的成果)とのバランス

一般に、科学は進歩すればするほどそのゴールは難解となり (当事者はこれをより根源的な問題に迫ったと評するはずであ るが)、もはや専門外の人々の理解を越えてしまう。一方、そ の謎解きを観測的・実験的に行なうために必要であると推定さ れる予算はふくれあがるだけである。したがって、一般の人に とって投資に対して得られる"利潤率"は単調減少の一途のよ うに見える。

高エネルギー実験の方々はすでに直面してきた問 題であろうが、ある段階まで進んだ学問は、どこま でやる(やれる)か、ではなく、どこでやめるか(妥 協するか)、が重要である。

宇宙論という学問において、 $h = 0.713567, \Omega_0 = 0.39875, \lambda_0 = 0.62837$ の桁まで決定することに意味はあるか?

このような議論は、果たして科学(あるいは学問・文化)は どこまで進歩することが可能であるか、というもう少し高尚な 問いかけにもつながる。おそらく人類の脳という本質的な限界 ではなく、環境という外的な要因によって決まってしまうであ ろうというのが(あまり夢のない)私の意見である。ビッグサ イエンスの宿命から考えても、宇宙物理には観測的なフィード バックとは関係なく、純粋に理論をガイダンスとして進まざる を得ない時期がいずれやって来ることは必然であろう。学問は 進歩する段階においては、ある程度自然に発展するものである が、いったん成熟した分野になってしまうと、学問的観点だけ ではなく、経済的および社会的さらには政治的な要素も色濃く なる。つまり、どのようにして学問分野を閉じてしまうかは極 めて困難な課題である。多くの政府関連機関のように、設立当 時の使命・役割を果たし終えても、自然消滅することは起こり 得ない。つまり、ソフトランディングは至難の業である。

学問の終焉の3パターン

- **パターン I:** ほとんどすべての重要な問題に答を見 つけて栄誉ある終焉を迎える、
- パターン II: 数学のように、徐々にではあるが着実 に理論的進歩を遂げることで少しずつ歴史的な 難問を解決しながら半永久的に発展を続ける、
- パターン III: 重要な問題を多く残していながら、観 測的にも理論的にも新たなブレークスルーを見 出すことができず、もはや普通の問題意識とは遊 離した重箱の隅をつつくような研究に終始する オタク集団としてほそぼそと生きながらえてい く、